

去年の春 逢へりし君に 恋ひにてし

桜の花は 迎へ来らしも

若宮年魚麻呂(巻八・一四三〇)

おもしろさがあると思
います。

この歌の作者は不明
ですが、左注に「若宮
年魚麻呂誦めり」と記
されています。若宮年
魚麻呂は他にも歌を暗
誦していたことが記
されており(巻三・三
八九左注)、栢の枝の
伝説をふまえた歌(巻
三・三八七)なども作
っています。人に擬
える歌を好んだ歌人と
いえます。

桜の花が見頃を迎え
ています。今回の歌は

『万葉集』巻八、春雑
歌に収められた一首

です。「桜の花の歌一
首 并せて短歌」とい

う簡潔な題詞が付さ
れており、主題が桜の

花そのものであるこ
とが知られます。長歌

一首(一四一九)と、
今回掲載の短歌一首

で一組になっていま

す。

長歌では、男女の髪
に飾られるように、桜

の花が国の果てまで咲
いている、と歌い、「桜

の花の にほひはもあ
なに」と結びます。「に

ほひ」とは現在とは異
なり、聴覚ではなく視

覚で感じる美しさを意
味します。「あなに」

は感嘆の言葉で、「古
事記」神話の中でイザ

やまと
万葉がたり

ナキ・イザナミが相互
にほめ合う際の言葉と

しても記されています

す。長歌では広く國中
の桜の美しさが歌われ

ますが、短歌ではひと
つの桜に焦点が絞られ

るようです。また長歌
とは異なり、桜を擬人

化しています。

とある桜の花は、前
の年「君」に逢い、恋

しく思いながら散って

しまったけれど、一年
人のことを讃える歌か

ぶりに再び咲き、恋し
く思っていた「君」に

逢うことができたよ
ろ、「君」の方が桜の

うですよ、という歌で
咲くのを待っていたの

です。この歌の「君」は
でしよう。一年ぶりの

宴会の主人かもしれ
ません。桜に恋い慕

われていたと表現す
ることで、参加者が主

歌うところにこの歌の

を、あえて桜の側から

歌うところのこの歌の

研究員・阪口由佳

【訳】去年の春お逢いしたあなたに、一年を恋うて

来た桜の花は、今こそお逢いできたらしいよ。

標結ひて

わが定めてし

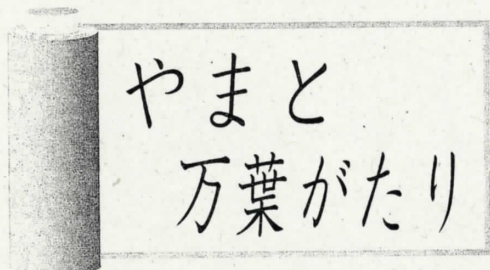
住吉の 浜の小松は 後もわが松

余明軍(巻三・三九四)

この歌は『万葉集』巻三、譬喩歌の部に収められた一首です。譬喩歌とはたとえを用いた歌で、恋心を歌うものを中心とします。

住吉は松の名所で、今回の歌も直訳では松を歌っているようですが、愛しい人を松にたとえていると考えられます。「標」とは占有の目印です。自分のも

のとして標をつけた松はこの先も自分の松なのだ、ということ、女性をこの先も手放さないという意味表示になります。この歌より早い時期に作られたと見られる恋の歌に「後もわが妻」で閉じる歌があります(巻十一・二四二八)。この歌を参考にしたのかもしれない。



『万葉集』はもともと漢字ばかりで書かれており、二句目「定めてし」の部分「定義」と書かれています。なぜ「義之」が「てし」と読めるのか、これは本居宣長の発見によります。王羲之(307〜365)が高名な書家で、書家が「手師」であるという意にかけ「羲(義)之」と記

したのだと指摘しました(『万葉集玉の小琴』など)。これが今では定説となっています。作者の余明軍は大伴旅人の資人(従者)で、百済王族系の渡来人と考える説が有力です。今回の歌以外に『万葉

集』に7首の歌を残し、うち5首は天平3年(731)7月、大伴旅人が亡くなった時期に大宰府の宴で詠まれたとする指摘もあります。余明軍と旅人・家持親子との結びつきがうかがえます。余明軍の歌一首としか書かれませんが、旅人が大宰帥であった時期に大宰府の宴で詠まれたとする指摘もあります。余明軍と旅人・家持親子との結びつきがうかがえます。余明軍の歌一首としか書かれませんが、旅人が大宰帥であった時期に大宰府の宴で詠まれたとする指摘もあります。余明軍と旅人・家持親子との結びつきがうかがえます。

▲訳▼しるしを結んでわがものと決めて
おいた住吉の浜の小松は、後にも私の松だ。

(県立万葉文化館主任
研究員・阪口由佳)